



シンギュラリティの時代

東日本大震災から丸6年を迎えた今年3月11日、なぜか関心がそそられた演題に惹かれて、静岡市内の講演会場まで足を運んだ。

講師が用意したパワーポイント

「(プス)しかない人間の脳の限界を、人間と機械が統合された文明によって超越する」時代となり、人類が経験したことのない人工知能の世界がくることを予測している。介護などの社会保障分野にかかわる者は、団塊の世代が後期高齢者

 転期に立つ経営の視座④
 握れば拳開けば掌

がスクリーンに映し出され、目に飛び込んできた「シンギュラリティ (Singularity: 技術的特異点)」の言葉にくぎづけとなった。

この用語を提唱したアメリカの発明家で未来学者のレイ・カーツワイルは、2045年頃になると「100兆の極端に遅い結合(シナ

に達することによる社会保障費急増への懸念と対策に目が奪われがちだ。いわゆる「2025年問題」である。

さらに、そこから20年を経た45年頃には、「シンギュラリティの時代」が訪れると指摘しているのだ。認識が従来と全く異なった際

はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。「継承と人材創造塾」主宰。「介護ビジョン」編集委員。介護福祉教育マスター。著書に「99の言葉の杖」(日本医療企画)、「早川浩士の常在学場」(筒井書房)、「介護人材創造塾」(筒井書房)、「介護保険改正に勝つ! 経営」(年友企画)、「データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望」(日本医療企画)など。

HP: <http://www.hayakawa-planning.com>

ブログ: <http://ameblo.jp/hayakawa-planning/>

VUCAワールド

では、今はどうか。

「コベルニクスの発想の転換(見方や考え方が正反対に変わることに)」とか、「パラダイムシフト(その時代や分野において当然のことと考えられていた認識や思想、社会全体の価値観などが、革命的にもしくは劇的に変化すること)」と表現するが、それでは表し難いほどの予測不能な未来がやってくるといっても過言ではない。

「私たちの生きている世界は日々、過去に経験したことのない、さまざまな新しい問題に直面し、正解のない問題に対し、そのたびに自分たちが最善と考える答えを出していくことが求められ、VUCAを前提とした社会をつくっていくことが必要である」と、畑村洋太郎

は著書『考える力をつける本』のなかで語る。VUCAとは、Volatility(変動性)、Uncertainty(不確実性)、Complexity(複雑性)、Ambiguity(曖昧性)の頭文字による合成語だ。

さらに、「これまで生きてきた社会は、できるだけ世界から不確実で曖昧な部分を排除し、効率

な運用をめざすことで発展してきたものの、これからの時代を生き抜くためにアジャイル(agile)、レジリエンス(Resilience)の2つのキーワードにし、VUCAワールドを前提とした戦略を立てることが大事である」とも説いている。

ここで言うアジャイルは、俊敏という洗練されたものではなく、兎にも角にも行動し、ジタバタしながらも答えを見つけようとすることだ。レジリエンスは、復元力と一口では言い難い窮地に陥っても、へこたれないしぶとさを持つことを意味する。

「先が見えないから動けない」とか、「動く方向が決まれば動く」のではなく、「誰も歩いたことのない道を歩く」という考え方が試されているのではないだろうか。

誰が何を言ったかではなく、何を言わんとしているのか、心して読むこと。作者の言葉を無条件で盲目的に受け入れることを戒めた「悉く書^{shitsoku}*1を信ずれば、即ち書無き^{shitsoku}に如かず(孟子)」がある。書物を鵜呑みにするのではなく、読解力を養いつつ時代を読み解く力を備えることを勧めたい。

握れば拳開けば掌^{にぎればこぶしあかばな}。

*1: 書は、儒教の根本聖典の1つ「書経」を指している。